



清洲城下町の「堀」の復元と木簡の出土地点

●昭和60年度以前 ▼昭和61年度

に、二地点から二四点ほど柿経の出土例があるが、原典が確認されたものは、いずれも法華経であり、それ以外の經典を書写したものは、本例が初めてである。

なお、木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

9 関係文献

財愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六一年度』（一九八七年）

（梅本博志）

愛知・清洲城下町遺跡(2)



(名古屋北部)

- 1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)一月～三月
- 3 発掘機関 清洲町教育委員会
- 4 調査担当者 高橋信明
- 5 遺跡の種類 城郭・都市跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

清洲(須)の地名は、一四世紀頃の『神鳳抄』にキヨスとみえるのが最初である。清洲の歴史的重要性が高まったのは、文明八年(一四七六)に尾張守護所が下津城から清洲城へ移されてからである。尾張の中心都市としての機能は、織田信長の入城から、慶長一五年(一六二〇)の名古屋城築城までである。以後、五条川を利用した城下町は解体され、美濃街道の宿場町とな

清洲城下町遺跡は、昭和五十六年以降の継続調査で徐々に解明されつつある。今回の調査地は、本丸跡の五条川対岸に位置し、幅一七mと幅一四mの溝を検出した。いずれも一六世紀前半に掘削されており、多量の施釉陶器に伴って三点の木簡が出土した。

(1) □月□

(2) ・「此事たて

さいすはて \square $\frac{1}{\text{分力}}$ のす

なら□□へは御ひ

・「い□ひにし□□_{〔やカ〕}

 $\frac{\sqrt{2}}{2}$

のふくこれと

てすて申すもの

つらにまうし

めあてたやのふく」

(3)

☐ ☐ ☐ 人 ☐ ☐ 二
☐ ☐ 道 ☐ ☐ 平
☐ ☐ 田 ☐ ☐ 一
☐ ☐ 光 ☐ ☐ 二
☐ ☐ 寺 ☐ ☐ 斗

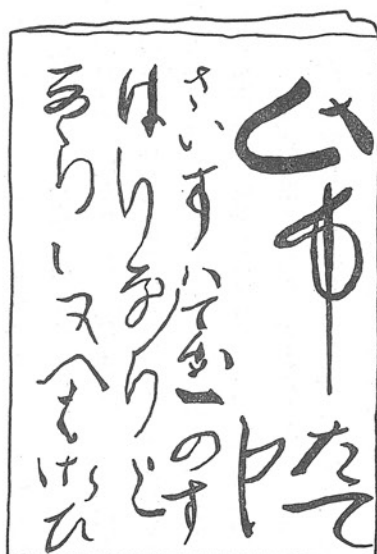
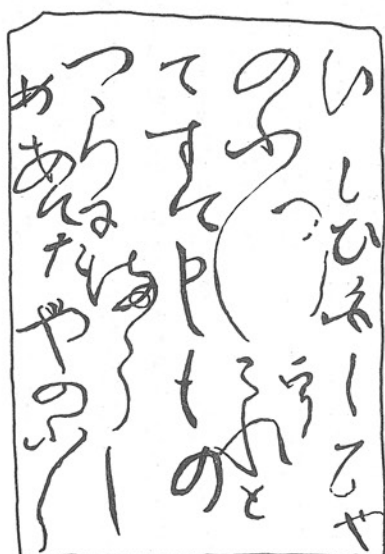
(2)はほぼ仮名書きである。消息文の一部であろうか。板材は完形品であるため、何枚かのセットになった一枚であろうか。

(3)は本来の形状を留めず転用されている。人数・人名・地名の記載からみて、何かの帳簿であろうか。近隣に平田の地名が残っている。

なお、木簡の釈読は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の全面的な御指導を得た。記して感謝します。

財愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和六一年度』（一九八七年）

(高橋信明)



(2)

静岡・居倉遺跡^{いぐら}

- 1 所在地 静岡県島田市野田
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)七月～八月
- 3 発掘機関 島田市教育委員会
- 4 調査担当者 澁谷昌彦・坂巻隆一
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 平安時代後期～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(家 山)

島田市は、古代から近世にかけて、大井川の流れにより、その右岸の初倉地区は遠江国、左岸の島田宿、野田地区等は駿河国に行政区分されていたが、居倉遺跡は、駿河国に属している。遺跡は島田市街地より北方へ二・五kmの野田地区に位置し、城山東側の大津谷川河床に立地している。この野田地域は、古くから大津谷川・尾川の土砂の堆積による後背湿地が発達して